ヨハネによる福音書 4 章 1～26 節

「ヨハネによる福音書」はその筆を進め、4 章にまで至りました。4 章は「サマリアの女」をめぐる出来事が章の 2／3 以上を占めていて、この出来事の持つ重要性が暗示されているようです。

今月はその初めの部分で、そこでは「サマリア」と「女性」にまつわる歴史的・文化的背景が、また当の女性の「人となり」がメッセージを聴き取るうえで重要なかぎになりますが、出来事から浮かび上がるイエスの思いとは はたして、どんなものでしょうか。ヨハネが示さんとするイエス像を御一緒に探ってゆければと思います。

『新共同訳聖書』の付す小見出しは、「イエスとサマリアの女」。サマリアの女性のイエスとの出会いの物語を追ってみましょう。

「イエスはそれを知ると・・・ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。
しかし、サマリアを通らねばならなかった」（1、3、4）

〈地理的状況としきたり〉

・当時、パレスチナは 3 つの地域に分かれていました。
　北の「ガリラヤ」(3)
　南の「ユダヤ」(3)
　その中間の「サマリア」(4)　　(聖書地図参照)

・そして、ユダヤからガリラヤへの通常のルートは、一度 ヨルダン川の向こう側に出て 川伝いに進み、再度ヨルダン川を横切り戻って ガリラヤに入る、というものでした。逆の ガリラヤからユダヤへの場合も同様です。

・サマリアを通れば、半分の道のりです。しかし、ユダヤ人はよほどのことがないかぎり、サマリアを通ることはありませんでした。

・歴史的な経緯(いきさつ)から、サマリア人(じん)とは可能なかぎり関わらないのがしきたりだったからです。

新共同訳聖書「6 新約時代のパレスチナ」

〈歴史的背景〉

・歴史的な経緯(いきさつ)とは、こうでした。

①紀元前 720 年頃、サマリア地方はアッシリア帝国に征服されます。このとき、侵入してきた異民族との雑婚が始まりました。こうしてサマリア人(じん)が人種的純粋性を失ったことを、ユダヤ人は赦(ゆる)されない罪と考えました。

②続いて今度は、ユダヤ地方がバビロニア帝国に征服されたときです。ユダヤ人は人種の純粋性を守り通しました。このことが、ユダヤ人の優越感をいっそう強いものにしました。

③そして、バビロニアからペルシア帝国の治世に時代が移り、捕囚(ほしゅう)から帰還を許されたユダヤ人が破壊されたエルサレムの神殿を再建し始めたときです。再建を知ったサマリア人が支援を申し出ました。ところが、ユダヤ人はこの申し出を拒絶。サマリア人の反感は決定的なものとなりました。

④これを引き金に、サマリア人は、サマリア地方の中心にあるゲリジム山に自分たちの神殿を建設。最後は、紀元前 129 年、ユダヤ人がこの神殿を破壊して、両者の憎しみは頂点に達したのでした。

・このような歴史を背景に持つ両者の関係からして、どんなに時間がかかっても、サマリアだけは通りたくない。サマリア人とは関わりたくない。それが、ユダヤ人としてのしきたりでした。

〈イエスはなぜ、そんなサマリアに〉

・つまり、イエスはそのしきたりを破ってまでして、サマリアに足を踏み入れられたということです。

・それにしても、なぜなのでしょう。

①ヨハネは、「それ」(1) が理由で イエスはユダヤを去った、と記しています。つまり、「イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼(バプテスマ)を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った」からである、と。イエスの一群が新興勢力として看過できず、しかも反体制的に映った、ということなのでしょう。

しかし、ユダヤの当局者との対立を避けたいといっても、時期はいまだ、宣教の初期の段階です。タブーのサマリアを通ってまでして、はたして緊急避難せねばならない情況にあったかどうか？

②では、他にどんな理由が考えられるでしょうか。「しかし、(サマリアを) 通らねばならなかった」(4) とある、その「ねばならなかった」という言葉の裏に、イエスの深い思いが隠されているように思われます。それはいったい、どんな思いなのでしょう？

「シカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。
・・・正午ごろのことである」(5〜6)
「サマリアの女が水をくみに来た」(7)

・イエスが「ヤコブの井戸」(6) に着かれたのは「正午ごろ」(6) でした (6)。と、そこで異様な光景を目にされます。一人の女性が井戸に「水をくみに来た」(7) からです。

・パレスチナでは、夕暮れ時の涼しい時を見計らって水汲みに出るのが普通でした。なのに、女性は誰も来ない真(ま)っ昼間(ぴるま)にやってきました。なぜ そんな時間に、なのでしょう。

・さらにもう一つ、不思議なことがあります。井戸は「ヤコブの井戸」(6) と呼ばれ、サマリアの町の「シカル」(5) にあったと記されていますが、正確にはシカルの郊外 1 キロほどの所に位置していたことが分かっています。だとすれば、シカルは町ですから、当然のこと、そこにも水汲み場があったはずです。なのに、わざわざ 1 キロも離れた所にまで、水を汲みに来ている。これまた、どうして、なのでしょうか。

イエス：「水を飲ませてください」(7)
サマリアの女：「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、
どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」(9)
解説：「ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである」(9)

・イエスは、しかし、そんな女性に御自分のほうから声をかけられます。「水を飲ませてください」(7)。

・けれども、女性の応答にはどこか、反感のようなものが感じられないでしょうか。それは「ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである」(9) と、背景の説明が付されています。

・ただ、ここには単なる字面以上の意味が隠されてもいるようです。単に「つき合わない」「接触しない」という以上の意味合いです。それは、「交際する」に当たる原語のギリシア語（*συγχρῶνται* <*συγχράομαι*）から読み取れることとして「(持ち物を) 共用する」ということであり、ここではつまりは「そういうことはしない」ということです。すなわち、サマリアの女性の水飲み道具は使わない、ということになります。

・当時、旅に出る人は釣瓶を携帯していました。水を汲むために井戸の中に降ろす水汲み道具です。けれども、イエスはそれを持っておられなかった。弟子たちが持っていってしまったのかもしれません。

・とすれば、女性の持っているものを使わねばなりません。しかし、それはユダヤ人にとっては 通常、サマリア人と同様に汚れることを意味していました。サマリアの女性は、ユダヤ人はそんなことは決してしない、と知っていました。

・ところが、イエスはそれをなさろうとされたのでした。

・それだけでなく、「女」(9) は男に劣っていると そう考えられていた時代であり、差別と偏見が当然のこととして社会に浸透していた時代です。

・なおかつ、その女性がただの女性ではないらしい、いわゆる札付きの女性だったとしたら・・・。

・これらのすべてを承知のうえで、それでもなお、イエスがサマリアの女性に御自分のほうから話しかけられたとしたら・・・。そこには、どんな思いがあったのでしょう。

・また、そのイエスを目の当たりにしたサマリアの女性の心持ちはどんなだったでしょうか。

「あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。
どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。
あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか」(11～12)

・ですが、サマリアの女性の歪んだ応答はこれでもまだ終わりません。女性の応答には依然、嘲りをも感じさせる、敵意の臭いがしないでしょうか。

・「生きた水」(11) とは、パレスチナでは当時、川などの流れる水や泉などから湧き出る水を意味していました。ヤコブの井戸は泉ではなく、地中から滲み出る井戸でしたが、要するに 良い水のことです。

・また、ヤコブの「井戸は深い」(11) と 女性が言っていますが、その深さは 30 メートル以上もあったと考えられています。
・女性はつまりは、こう言い返しているわけです。「私たちの偉大な父祖ヤコブは、こんなにも深く、こんなにも水の量の豊かな井戸を掘って、私たちに残してくれました。あなたは、これよりももっと豊かで良い泉をくれるとおっしゃるのですか」「あなたはヤコブよりも偉い（と言われる）のですか」(12)。

イエス：「この水を飲む者はだれでもまた渇く。
しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。
わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(13〜14)
サマリアの女：「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、
その水をください」(15)

・こうして、二人の対話はしだいに事の核心へと深められてゆきますが、それにしても、ふたりがそれぞれに口にする「水」という言葉に大きなズレのあることがお分かりかと思います。
・イエスの言われる「この水」(13) とは？ また、「わたしが与える水」(14) とは？ そして、それらを受けて、サマリアの女性が口にした「その水」(15) とは？
・そこに はたして、どんなズレが認められるでしょうか。そして、そのズレの裏に垣間見（かいまみ）られる女性の本心とは？
・実際、サマリアの女性の願いの言葉、「ここにくみに来なくてもいいように・・・」(15) には、彼女の隠れた本心が見え隠れしているように思われます。その本心とはいったい、何でしょうか。

「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」(16)
「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。
あなたは、ありのままを言ったわけだ」(18)

・イエスはここに至って、サマリアの女性にその「夫」(16) のことを語らせます。
・そこで明らかにされたのは、彼女には「五人の夫がいた」(18) が、そのすべてに失敗し、今また「夫ではない」(18) 6 人目の男と同棲（どうせい）していることでした。
・それにしても、イエスはなぜ、このようなところにサマリアの女性を導き入れられたのでしょうか。
・しかも、これにより、彼女は「ありのままを言った」(18) といいます。
・サマリアの女性は、結局、
①何に向き合わされたのか？
②何に出会わされたのか？
・彼女はそもそも、
①何を知らずにいたのか？
②何に渇いていたのか？

③何を求めていたのか？

・そして、詰まるところ、

①サマリアの女性の本質的な問題とは いったい、何だったのでしょうか。

②それは はたして、この私たちと無縁なのでしょうか。

③その問題に、イエスはどう向かわれ、どんな答えを与えられたのでしょうか。

出来事の全体を追ってみましょう

ふたりのやり取りの進み行きに、

イエスの何を見るか？

サマリアの女の何を見るか？

イエスの向かい方は？

女の受け止め方は？

その変化は？

〈イエス〉	〈サマリアの女〉
・水を飲ませてください。(7)　→	・ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。(9)
・もしあなたが、・・・「水を飲ませてください」と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。(10)　→	・あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。(11～12)
・この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。(13～14)　→	・主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。(15)
・行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。(16)　→	・主よ、あなたは預言者だとお見受けします。(19)
・わたしを信じなさい (21)。〔あなたが待っている、キリストと言われる救い主〕それは、あなたと話しているこのわたしである。(26)　→	・さあ、見に来てください。・・・もしかしたら、この方がメシアかもしれません。(29)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

イエスの人となりについて、この出来事からどんな印象を受けるでしょうか。
イエスがサマリアの女性に差し出されたメッセージとは、何でしょうか。
私たちに差し出してくださっているメッセージとは、何でしょうか。
私たちに問いかけておられるメッセージとは、何でしょうか。

〔参 照〕

「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は・・・その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」

(ヨハネ 7：37～38)